

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

令和3年 7月 30日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	田中千聖

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
京都大学 芦生研究林
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
基礎フィールドワーク実習 (無雪期) : 芦生実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
令和3年7月19日 ~ 令和3年7月21日 (3日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
石原准教授、技術職員 柴田氏、太田氏、田歌舎代表 藤原氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果 : 長さ自由)
写真 (必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
本実習は、フィールドワークに必要とされる、野外で研究するための基礎技術、および野外での安全確保法を学ぶために、芦生研究林において3日間の日程で行われた。
■ 日程 2021/7/19 午前 : 芦生研究林概要レクチャー、資料館見学、トロッコ沿いの森林内散策 2021/7/20 午前 : シカ柵の見学・修繕、大カツラの木見学 2021/7/21 午前 : 田歌舎 藤原さん講演
■ 実習内容 初日は午後には芦生研究林に到着後、初めに石原先生によるガイダンスを受けた。芦生の森では多様な植物が見られ、絶滅が危惧されている植物も多く存在している。それら植物を含め、芦生の森の多様性を維持するために、域外保全の活動を行っている。種の絶滅を防ぐためにも、域外保全は重要であり、また、その活動を多くの方に知ってもらうことも大切だと感じた。ガイダンスの後、研究林内のトロッコ沿いを、技術職員の柴田さんのレクチャーを受けながら探索した。林内には様々な植物が生い茂っており、特徴的な植物については説明を受けながら観察した。私は植物の種類には詳しくないため木や草を見分けるのは難しかったが、実物を観察しながら種類や特徴を覚えるのは楽しく、実習前よりも幾らか知識が着いたように思う。柴田さんの説明に興味を持った種は、栗の木であった。腐りにくく加工がしやすく、さらに長持ちするため、木材として優秀だと教わった。栗の木が木材として使用されているイメージが無かったため、少し驚いた。また、林内にはクマ剥ぎを予防するために、赤いビニールテープを巻いている木々が多くみられた。クマ剥ぎによる被害は少なくなく、中には剥がされた傷口から菌が侵入し、腐れて幹に穴が開いた木も見られた。 林内を探索後、資料館を見学した。芦生の森で見られる動物 (ウサギやイタチ、カモシカ等) の剥製や昆虫標本がたくさん展示されており、一つ一つをじっくり見て回った。他にも、研究林内に生育する大カツラの木を書き続けている豊島先生の作品も展示されており、芦生の森が、生物学者以外の方にも利用されていることが分かった。 2日目はバスで山奥に移動し、シカ柵を見学した。初めに訪れたウツロ谷のシカ柵では、主に草本類の植生変化が観察できた。シカ柵の外側にはシダ類が生い茂っており、シカが食べないイグサやダンドボロギクも多くみられた。一方で柵内には、柵外では見られない種が多くみられた。シカの個体数が多く採食圧が高いと植生が回復しないのは容易に想像できるが、近年はシカが低密度であっても植生の多様性が回復しないという。原因はいくつか考えられるが、主に、埋土種子の単純化、親が少なく種子の生産が少ない、等といった理由が挙げられていた。この他に、シカが食べない植物が他の植物の成長を阻害している、という考えもあったが、柵外の植物の被覆度を見ると、この考えが大きく影響しているように感じた。石原先生の解説の後、私たちはシカが侵入してしまった部分のシカ柵の修繕を行った。ネットが落ちないように、金具でしっかり固定した。想像していたよりも頑丈に固定しないと、すぐに侵入されてしまうのだなと感じた。 午後は、モンドリ谷のシカ柵を見学した。広範囲にシカ柵が張り巡らされており、柵を設置するタイミングが異なる2地点のシカ柵設置場所を見学し、柵内全体の植生の回復度合いを比較することができた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

柴田さんの説明によると、シカ柵のネットの種類によっては、地際の部分を小動物に齧られて穴が開いてしまうこともあった。対策としては、防風ネットを張ったり、塩ビ管を通して小動物の通り道を作ったりといった工夫がされていた。

3日目は、田舎の藤原さんのレクチャーを受けた。レクチャーの内容は主に獣の増減についてであり、特に興味を持ったのは、森林で最初に増えるのはイノシシで、次にシカ、そしてサルの順で個体数が増加する、という考えだった。これが事実であると、次に来る被害を予防する見通しが立てやすいのではないかと感じた。また、森林の獣が増えるトリガーとなったのは戦後のイヌの放し飼いの禁止が主であり、それに加えて石油の使用、都会への移住も原因である、というお話も興味深かった。講演後の討論では、よく訓練されたイヌを森で放し飼いで、獣害を防げるのではないかという意見もあり、自分では考えつかないような意見も聞いてとても勉強になった。

3日間の実習を通して、林内を歩きながら観察し、フィールドワークに必要とされる基礎的な知識をある程度身につけることができたと思う。シカによる獣害は話にはよく聞いていたが、実際にその程度を確認することができて、とても勉強になった。また、3日間をWRCの同期や同年代の学生、先生方と過ごすことで、グループで協力することの大切さも学べた。本実習で学んだことは、今後の自身の研究活動に大いに活用していきたいと思う。



シカ柵の見学（石原先生解説）



シカ柵の見学（柴田さん解説）

6. その他（特記事項など）

本実習を遂行するにあたって、私たちを暖かく受け入れて下さった石原先生をはじめとする芦生研究林の皆さま、および藤原さまに心よりお礼申し上げます。